

# 「喫煙の社会的規制はどこまで必要か」インタビュー

喫煙への社会的規制についてどう考えますか。

「たばこは知られているだけでも、高濃縮以上の有害物質を含み、うち六十種類が発がん物質といわれている。その有害性と依存性で多くの人が中毒にまかされている。その数は世界中で年間約五百万人、日本だけでも十一万人、今後とも適切な規制がなされなければ、たばこによる死者は二〇〇〇年に世界で二千万人に達する予想されている。人命は何よりも重い。たばこの致命的な有害性を誰もが理解し、互いの命を尊重し合う環境を基に、規制なら大いに賛成だ」

規制の風潮が強まると、喫煙者の権利が侵害されるのではと懸念する方もいますか。

たばこが健康に良くないことは誰もが分かっているはず。日本人の喫煙率も年々下がっています。それでも男性に限れば、4割以上がたばこを吸っています。受動喫煙の被害も次々に報告され、歩きたばこを禁止する条例や禁煙場所、禁煙車両が増えました。一方、肩身の狭い思いをしながらも一服がやめられない愛煙家も多く見られます。喫煙の社会的規制は今後も強めていく必要があるのか、それとも行き過ぎなのか、立場の異なる専門家2氏に聞きました。

## トークバトル Talk Battle

### 人間の命何よりも大事

静岡大教育学部 助教授 赤田 信一氏



あかだ・しんいち氏 1960年生、大分県生まれ。大分大教育学部卒、筑波大大学院修了。現在、静岡大教育学部助教授。教育学・健康教育が専門。

対立構図にすり替えられていく。現在の規制は喫煙行為を全面的に禁じるものではない。他人に迷惑をかけたリ、健康被害を与えたりしない限りにおいては喫煙の自由は認められている。喫煙禁止エリアの設定は自由の侵害とす。喫煙を禁じたら、どこも残念をこぼさず、どこか、自由には規制やルールを定めるという社会的な責任が降り、受動喫煙が発生するリスクで喫煙する人は許されないのは言うまでもない。

「喫煙者のほとんどは他人に迷惑をかけるような喫煙者ではない。他人の健康に配慮していただいていることには感謝したい。同時に自分の体もいたわってあげてほしい。喫煙の害はよく分かっていても命懸けで喫煙する価値はあると思う。たばこは喫煙者の命を本気で狙っているからだ」

